

令和5年度 学校関係者評価書

東京学芸大学附属国際中等教育学校

1. 学校関係者による評価

領 域	学校関係者による評価と今後の課題
学校運営	<p>様々なことに積極的に挑戦し、取り組みが実践されていることに敬意を払う。</p> <p>学校評価アンケートへの回答率が下がっていることについて、目標値があるわけではないとのことだが、オンラインアンケートに変わったことで回答を忘れるケースが多いこと、また年末年始の繁忙期の回答は困難があることが原因として考えられる。</p> <p>新型コロナウイルスの威力は低減したものの、感染数は未だに減少していない様子である。100年に一度といわれている経験は、社会、学校共に対応をまとめ、記録に残し未来につなぐ準備をしておくべきである。</p> <p>生徒の学校内外のマナーについて、自由な服装、校風ということもあり、派手な格好をする生徒も多い。一方で、自由であるからこそマナーについてよく考えている生徒も多く、アイデンティティを表現する術の一つとして服装などをとらえている様子もある。</p> <p>単に大学への進学率を意識し、入試への合格を向けた教育を行うのではなく、グローバルな視野の育成等を教育理念として掲げ、実際にそのような教育を行えているように窺われる。そして、画一的な教育内容とならない分、どうしても教師への負担が大きくなるし、今後増大していくものと予想される。</p> <p>特に、進路指導部の自己点検・評価書の中で業務の外注等について積極的に説明がなされており、今後も内外での作業を適切に分担できるようにご検討いただきたい。</p>
教育活動	<p>生成AIへの対応についてどう考え、学校としてどのように対応しているか。</p> <p>→東京学芸大学としての指針をもとに対応している。論文などはTurnitinというアプリケーションを用いて、盗用や剽窃、過度な引用がないか確認しているとともに、メンターと生徒による対面の指導を複数回行っている。短い小論文やエッセイなどについては、形成的評価、総括的評価共に授業内にその場で書かせることにより不正行為を防ぐ工夫もなされている。不正行為については生活指導の対象ともなっている。</p> <p>資料を確認する限り、個々の学生の関心事を重視した内容の授業が行われているような印象を受けるものの、比較的高評価な項目が多い中で、「16 授業はひとりひとりに適するように工夫されている」との質問への評価が、生徒及び保護者共に悪いように感じる。教職員との関係でも良い評価は6割未満となっており、問題点を見出しつつ改善を図りたい。</p> <p>特に、教務部の自己点検・評価書の中で、評価が各教科に任せきりになってしまっていた旨の反省点が述べられており、ひとりひとりに適する授業を行おうとすればするほど、統一的な評価が難しくなってしまうものと窺われるが、そもそもひとりひとりに適する授業がなされているとの評価が得られなければ、成績評価の改善の問題に至れないと思われる。</p>
研究活動	<p>学校による生成AIの積極的な利用については、テストの作問や生徒の答案の採点に使用する研究もおこなわれている。</p> <p>研究内容が他分野に亘っており、学生個人が自主的に課題を探しながら研究を深めていることが窺われ、好印象を抱いた。</p> <p>ISSチャレンジ2023の生徒研究成果発表会における審査の中で、グローバル部門の「C：研究成果」の評価の目安に際して、研究課題の結論の具体性が掲げられていた。その中で評</p>

	<p>価されていることが窺われるが、課題の発見及び問題点の具体的な指摘と、解決策の具体的な提案については別問題だと思われる。</p> <p>特に、解決策については、具体性だけでなく実現可能性や合理性等についても評価対象として別項目として列挙してあげた方が、自由な発想に基づく研究が評価されやすいのではないかと感じた。</p>
<p>学生の教育 ・ 支援活動</p>	<p>生活指導部の自己点検・評価書を見る限り、十分な支援環境が整備されているように思われる。SC及びSSWとの協力関係も築けている印象を受ける。</p> <p>自己点検書である以上当然のこととも思えるものの、反省点等が教師目線の内容となっているため、更なる改善に向けてSC及びSSW目線の内容も踏まえて、次年度以降の目標を定めると、より良い環境を整備できるのではないかと感じた。</p>
<p>社会貢献 活動</p>	<p>学校評価アンケートについて、地域との連携について評価が高くないことについて、評価が低いのではなく、学校がどのような活動を行っているのかわからないのではないかと。また、「地域」が示すイメージが多様で、隣接する町に限られるのか、広く他県や海外を含む学校外コミュニティを指すのかわかりづらいため評価につながらないことも考えられる。学校として、「地域」の定義を「学校外コミュニティ」と明確に示し、様々な取り組みを積極的にアピールすべきである。近隣の住人としては、国立大附属校は公立校に比べてかわりを持ちづらいが、特に苦情を聞くことは無いことから問題ないと考えてよいと考える。</p> <p>例年意見されている部分であり、例年通り地域との連携に関するアンケート結果の評価が芳しくない。国立校として難しいところはあるものと考えられるが、中期的な学校経営目標の中で、隣接の附属小学校がPYP認定校となったことに伴い、地域における先導的な教育モデルの開発も謳われているところでもあり、各行事等の中で地元の観点を含む要素を検討されたい。</p>

2. 評価の実施概要

対面会議を実施し、意見を収集した。メンバーの一部が同時双方向型オンライン、メール会議で参加した。資料として、学校経営計画及び数値目標の達成度合い、各分掌の点検・評価、学校アンケート結果、進路実績、年間行事予定表、学校要覧、パンフレット、ニュースレターを配付した。

3. 学校関係者評価委員会開催日 令和6（2024）3月7日

4. 学校関係者委員会委員

- 保護者

PTA会長

森田 美智子

- 学校評議員

岡本 裕明

貫井 里美

福元 雄二郎

古屋 力

増井 多恵子

山口 博明